



希望のケルン

令和4年2月25日発行
 藤沢町住民自治協議会
 〒029-3405
 一関市藤沢町藤沢字仁郷12番地-5
 電話:63-5515 Fax:63-5517
 Mail: fuji@dontokoi-f.com
 ホームページ URL:
<https://dontokoi-f.com/>
 皆様の情報をお待ちしております。

町民の固い意思 ～希望のケルン～

藤沢町住民自治協議会では広報の名前にもなっている「希望のケルン」に焦点を当て、これまで進められてきた「藤沢のまちづくり」の原点、住民主体のまちづくりを先人たちが脈々と築き上げてきた事象を、もう一度再確認してみることにしました。

将来に向け、時代と共に生きる確かな道筋を創り上げて行きたいという思いで、この特集号を発行しました。

まちづくりの道標



藤沢支所前に建立された道標「希望のケルン」

この「希望のケルン」は、一関市役所藤沢支所の前方、道路の三叉路に面したところにあります。

今から30年前の平成2年11月に、藤沢地域の住民の手によりひとつひとつ集められ、その石を積み上げられて造った石塔です。

元来「ケルン」とは、登山の際に登山者の道標として、登山ルートに建てられたものをいいます。

「希望のケルン」は、藤沢町自治会協議会設立時に町民の固い意思を、「石」と「意志」をかけ、住民自治への熱い思いをモニュメントとして表現し、建立されたものです。

この「住民主体のまちづくり」こそ、私達の将来を照らし、導いてくれる道標なのです。

「希望のケルン」に寄せて

前 藤沢町自治会協議会長
 小野寺 恒雄 さん



昭和40年代後半、激変する社会情勢は地方の過疎化という産物を生み出しました。当時、藤沢では町の生き残りをかけた戦いで「みんなの藤沢みんなでつくろう」を合い言葉に、住民自治確立へ向けた取り組みを始めました。

その取り組みでは、地域毎にミニ計画策定、「希望のケルン」の建立、ビューティフル藤沢整備事業による「10万本の花咲く町」として花壇やフラワーロードづくり、町内クリーンアップ一斉清掃、生活物資リサイクル集団回収事業などを通して、地域の連携による揺るぎない藤沢の創造を結集してきました。

「希望のケルン」建立当時のことを思い浮かべますと、建設地に地域の住民がひとつひとつ「石」を持ち寄り、現場で「ケルン」の形状をどうするか、相談をしながら積み上げていった情景が浮かびます。まさに、住民自治の象徴となる「希望のケルン」の誕生でした。

「地域が地域の責任で地域を創る」という思いと、地域のあり方を見つめ直し、新しい時代の創造者として、各自治会がますます機能を発揮し、藤沢町住民自治協議会が地域の発展に向けて歩んで行かれますことを祈念します。

高度経済成長時代の藤沢町

合併前の旧藤沢町は急速に過疎化が進み、半世紀前の昭和46年には、過疎地域の指定を受けました。その課題解決に向けて住民が一丸となり住民自治の仕組みづくりに取り組み、「町民主体のまちづくり」を町政推進の中核に位置づけ、地域毎に町政座談会を開催、共通理解を求めました。

高度経済成長は、この地に人口流出という集落の疲弊をもたらし、崩壊寸前の集落の再生のため、行政区を母体とした「自治会」の結成を促し、「自分たちの地域は自分たちでつくる」という、自治意識の高揚を推進しました。当時の様子が、藤沢町史に下記のとおり記載されています。

(藤沢町史 本編中 196頁抜粋)

第三節 社会組織と区域の運営

本町2,700戸を分割した43行政区があって、区長を中心とした行政系列の外、各行政区には、自治組織ともなっている自治会組織が誕生している。

近年一般に農村地帯の過疎現象の進行と生活の多様化から、うるわしい連帯感がうすれると言われているが、その衰退の潮流を変え明るく豊かな誰もが住みたくなるような郷土愛に満ちた藤沢をつくろうと、全町民総参加による町づくりの運動は、この自治会活動の中に大いにいかされつつある。

その活動は部落公民館が拠りどころとなり、中央公民館と相連携しその成果をあげている。

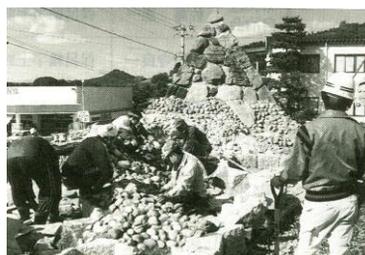
こうしたなかで、わが藤沢町は、町長による部落振興ミニ計画を決定し、これを基本として明るく住みよい町づくりをスローガンに掲げ人間尊重を基調とした、地域開発と共に相互に支え合えるコミュニティーを創造し、ともに発展しようとしている。

○昭和30年 町村合併直前の状況

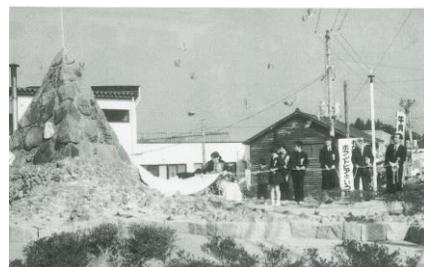
	旧藤沢町	旧黄海村	旧大津保村 (津谷川除く)	旧八沢村	新藤沢町
人口	5,110人	4,943人	2,787人	3,743人	16,583人
戸数	830戸	765戸	422戸	543戸	2,580戸

○藤沢地域の人口・世帯数の推移

年代	人口	世帯数
昭和36年	15,537人	2,726戸
昭和46年	12,561人	2,717戸
昭和56年	11,632人	2,670戸
平成3年	11,318人	2,849戸
平成13年	10,530人	2,993戸
平成23年	9,032人	2,948戸
令和3年	7,479人	2,808戸



左：持ち寄った「石」を積み上げる
(自治会協議会30周年記念誌より)



右：希望のケルン除幕式
「広報ふじさわ」平成2年11月15日号掲載

「自治会ミニ計画」づくりへ

当時は時代の変化がすさまじく、人口減少（過疎化）が進む中、町の再生に向けた模索が始まりました。

昭和50年から住民主体のまちづくりを推進するため、住民と行政が一体となって地域課題の解決に向けて「自治会ミニ計画」づくりがすすめられました。

この計画は、現在も「住民主体のまちづくり」の基礎となっています。



住民主体のまちづくり ～みんなの藤沢みんなでつくろう～

町内各地で開催された町政座談会を通じ、また「自治会と行政の連絡会議」現在の「協働のまちづくり会議」での行政と住民の意見交換を通じて、「みんなの藤沢みんなでつくろう」を合い言葉に、「農工一体のまちづくり」、「健康と福祉の里づくり」など、住民主体のまちづくりが町の総合計画に反映され具体的な事業として、各種展開されました。

「農工一体のまちづくり」

○企業誘致

昭和57年から昭和60年にかけて、八沢工業団地、大母工業団地が完成、昭和60年から平成16年までに、昭栄化工（株）岩手工場、大昌電子（株）岩手工場、（株）マーナーコスメチックス栗駒高原岩手工場、サカイ産業（株）岩手工場などの企業誘致が進み、雇用の場が確保されました。

○農業

昭和51年に農業立町が掲げられ、昭和57年の県営藤崎かんばい事業・広域農道の起工、国営農地開発事業により農地が造成され、平成10年に同事業が完工、大規模農地造成、農道整備、相川ダムなどが建設され、農業を基盤とする体制が整いました。現在では、特産品のりんごをはじめ、肉用牛など農業によるまちづくりの確かな歩みが展開されています。

「健康と福祉の里づくり」

昭和59年の障害者支援施設ふじの実学園の開園、昭和57年に特別養護老人ホーム光栄荘が開所、昭和62年同施設内にデイサービスセンターが完成、平成5年には国民健康保険藤沢町民病院の開院、平成8年老人保健施設老健ふじさわが開所など、福祉のまちづくりが着々と進められました。

支え合いのまちづくりは、現在では食生活改善推進員による「ふれあい一皿運動」をはじめ、第13区自治会の「お助け隊」によるボランティア活動など多岐にわたり展開されています。

みんなで積み上げてきた“意思（石）”

昭和50年3月に、現在の藤沢町住民自治協議会の基となる「藤沢町自治会連絡協議会」が設立されてから、これまで多岐にわたる活動を展開してきました。

地域の課題解決のため取り組んできた活動には、町民による「クリーンアップ一斉清掃」や「生活物資リサイクル集団回収事業」をはじめ、10万本の花咲く町を目指して取り組んでいる「ビューティフル藤沢整備事業」などがあります。

具体的な歩みは、下表のとおりです。



年 月	協議会の歩み
昭和50年 3月	藤沢町自治会連絡協議会が発足する
昭和50年 7月	自治会毎に自治会憲章を制定する 自治会と行政の連絡会議を開く
昭和60年10月	藤沢町自治会協議会創立10周年を迎える
昭和63年 4月	ビューティフル藤沢整備事業がスタートする
平成 2年11月	「希望のケルン」が完成し、除幕式を行う
平成 4年 4月	藤沢町クリーンアップ（町内一斉清掃）がスタート
平成 5年 7月	国保藤沢町民病院が開業
平成 5年11月	第1回リサイクル集団回収事業がスタート
平成 7年10月	藤沢町自治会協議会創立20周年記念式典を開催
平成11年 3月	町内6カ所で「地域づくりフォーラム」を開催
平成13年 1月	環境美化優良団体として県知事表彰
平成16年11月	藤沢町自治会協議会創立30周年記念式典を開催
平成23年 8月	道路美化に努めたその業績に対し、国土交通大臣から感謝状が授与される
平成23年10月	藤沢町が一関市と合併
平成26年11月	特別会員19団体を加え、「藤沢町住民自治協議会」と名称を変更する
平成28年 4月	藤沢市民センターの指定管理者（第1号）となる

「希望のケルン特集号」発行に寄せて

藤沢町住民自治協議会会長 千田 博



「希望のケルン」は、平成2年4月に開催された「自治会と行政の連絡会議」で設置が協議され、建立が決定されました。

その年は、藤沢町政施行35周年、藤沢町自治会創立15周年の節目の年であり「みんなの藤沢みんなで作ろう」を合い言葉に、町民全体のまちづくりの中で、3月には全国農村整備コンクールで「農林水産大臣賞」、前年3月に藤沢町消防団が「消防長官旗」受賞と、まちづくりの取り組みが全国で高く評価されたことから、その記念に「栄光の像」「奉仕の像」の建立が計画されていました。

そのような中で「希望のケルン」は、2年前から始まった「ビューティフル藤沢整備事業」を記念し、住民自らまちづくりのシンボルとして建立計画がありました。

設置場所は、役場道路向いの駐車場で、材料の「石」は各自治会から持ち寄ることとし、当時の人口数と同じ11,300個が集まりました。

この工事には町民が積極的に参加し、藤沢町の形に小石を並べ、中央には43自治会の大き目の石を1個ずつ四角錐に積み上げました。

11月3日に完成のお披露目があり、折しも産業文化祭の開会中であり、大勢の町民の方々が完成を喜びあったのでした。

以来30数年が経ちますが、「希望のケルン」に込められた「住民自治」による地域づくりへの堅い「意思」は、脈々として現在に引き継がれております。

合併により一関市として歩み始め10年経過しましたが、協働のまちづくりが進められる中で、地域協働体として藤沢町住民自治協議会の役割はますます重要度を増して参ります。

当時の「自治会と行政の連絡会議」は「協働のまちづくり会議」と名を変え、地域課題を行政と地域住民の協議、意見交換の場として継続されております。

また、10万本の花咲く美しき藤沢を目指した「ビューティフル藤沢整備事業」も、33回を数え、「一関市花いっぱいコンクール」と連動しながら、自治会、個人、事業所へと花の広がりをみえています。

改めて、「希望のケルン」に託したまちづくり、地域づくりの取り組みを顧み、一步一步着実に皆さんと「希望のケルン」を道標に前進して参りたいと思います。

町民主体のまちづくり推進の道標
ビューティフル藤沢整備事業記念

「希望のケルン」

町民の限りない夢と希望の象徴として、愛宕山麓に燦然と光を放つこの石塔は、1万2千町民が搬入した石（意思）と寄せられた浄財をもとに建てられた。

平成2年11月



～～編集後記～～

藤沢町住民自治協議会広報部会では、今年度の取り組みとして藤沢のまちづくりの象徴である「希望のケルン」について、ケルン建設までの経過、目的などを改めて地域の皆さんとともに意義を考え、みんなで再認識してもらおうと特集号発行に取り組みました。限られた期間の中で編集することは容易なことではありませんでしたが、部員みんなで様々なアイデアを持ち寄り、意見を出し合いながらすすめてきました。地域の皆様に少しでもケルンの意義を感じてもらえましたら幸いです。

今後とも広報部会では、地域の情報を「広報ケルン」や協議会ホームページを活用しながら発信してまいりますので、ご協力のほどよろしくお願いいたします。

藤沢町住民自治協議会 広報部会
吉田 浩和 星 義弘
佐藤 裕一 小野寺有史
熊谷 律子 千葉 幹雄